

玉造教会ニュース

10月号

発行：玉造教会 評議会

編集：玉造教会 広報委員会

〒540-0004

大阪府中央区玉造2-24-22

TEL 06-6941-2332

FAX 06-6941-2605

シャローム

2017年10月1日 419号

大いなる希望

崔 周永 神父、ローマ

様々な失敗をしでかしてきた。どうすれば、より賢くなるのか、と本気で取り組んだ時期もあった。聖書、とりわけ知恵文学を精魂込めて読んだり、失敗の原因を論理的に分析して隙が何処で生じたのか、と反省したりなど。要するに、どうすればよくなるのか、に気を取られていた。じゃ、それでよくなったのかと訊かれたらどう答えるべきなのか、迷ってしまいそうだ。何故なら、判定する基準が一体なんなのか、決め難いからだ。1か月に4回、つまり、週に一回の頻度だったのが、2週間に一回くらいになり、失敗による迷惑もより少なくなった、と。確かに、良くなったと言える。その調子でやっていけば、最終的には少なくとも失敗の数は減っていくだろう。だが、自分というものが、人間がどのようなものなのか徐々に分かっていくに伴い、頑張ればできるという風なことがそんなに頼もしくなくなりつつある。例えば、こう思うようになったのだ。よくやろうとするのではなく、やるべきことの数を減らす。欲張ってあれもこれもと引き受けては上手くできずドタバタするより最初から、今はちょっと無理です、と断る。それに、できる限り約束をしないこと。

4/154、この数字の意味は、ペルージャ滞在の154日間の内4回の約束があった、という意味だが、つまり、ほぼ縛られずに思いっきり勉強ができた、とのこと。因みに、4回の約束、全部友たちとの大事な食事だった。

‘幸せですか。はい、そうです’。偽りのない答えだ。いつから躊躇わず(ためらわず)、幸せです、と言えるようになったのか。イエス様との出会いがあった日からだ。じゃ、しんどいことは全然ないでしょうね、と言われたら、‘いいえ、違います。しんどいことは沢山あります’と矛盾のような答えをするしかない。となると、幸せというのは全く辛いことのない状態ではなく、色々あるけど、ひっくるめてあるいは根本的に幸せである、とのことに当たる。逆に言うと、思い煩いや苦しみが全部無くなった時こそ待ちに待った幸せの到来ではなく、足を引っ張るものは沢山あるけど、幸せです、と言える。ふざけるな、と言いたい方がいらっしゃるかもしれないが、もうちょっと待って頂きたい。三位一体。御父、御子、聖霊が三つのようで一つでいらっしゃるという要理だが、これはどういうものなのかと言うと、しんどいけれど幸せなのだという話と深い関係がある。何故なのか。三という数字に注目して頂きたい。しんどい出来事が一つ、それを辛く思っている自分も一つ、これで二つ。

(2 ページ目に続く →→→)

二つだけを考える時はこうなる。ああ、しんどい。俺はしんどい、と。延々と二つの間を彷徨う（さまよう）しかない。出口がないのだから。しかし、この閉鎖的で無駄に往復するばかりの枠に新しい第三者が現れる。‘そうではない。今貴方の苦しみは必ず幸せに変わる。いいえ、それは既に幸せなのだ’と言ってくる何もの。希望、信頼、そして信仰と言えるだろう。イエス様が引き受けた十字架での苦しみは救い、つまり御父と聖霊による新しい希望が抜けていたら、ただの苦しみにしか思えない。全てのことは必ず意味がある。苦しみという苦い果物は救いの種を既に身ごもっている。

日本から大変嬉しい便りがあった。8月イタリア語の勉強で疲れ切っていた頃、親しい友人から赤ちゃんを身ごもったというメールが届いた。待ちに待っていた赤ちゃんだったので早速お祝いのメールを送った。友人からの次のメールではもうちょっとで安定期に入る、と。赤ちゃんの、胎内で育っていくことへの驚きと喜びを綴っていた彼女。体調が芳しくなかったペルージャでの8月、嬉しい知らせを送ってくれた彼女への返事に、今自分は言葉を身ごもっているような気がしてきた、と書いた。それから外国語の言葉という赤ちゃんを身ごもることはしんどいことだが、喜びを持って大事に育てていくのだ、と思うようになった。つわりがあり、産みの苦しみもあるだろうけれど、生まれて来るかけがえのない命、赤ちゃんのことを思うと全てのことが喜びに変わる。希望に変わる。救いを今ここで生きるようになる。

来る月曜日、46番バスでヴェネチア広場まで行って、歩いてグレゴリアン大学に着き、午前9時から午後1時までのイタリア語授業に喜んで与ろう。宿題も忘れずに鞆に入れなきゃ。

玉造の方々、お祈り致します。

生まれてくる赤ちゃんの為に、お祈り宜しくお願い致します。